

すべての人間は死ぬときにアダムを見る、とゾハールは語っている(エル18b、ザラ8a、創R17、民R19…18、T創、ゾハール1…127a、b)。
↓「アダムの外衣」

アダム・カドモン Adam Kadmon [ヘブライ語]

「原人間」の意味。ヘブライ語でアダム・エルヨン、アラム語でアダム・イラーとも呼ばれている。創世記の物語に出てくる土(アダマ)から形成されたもうい体つきのアダムとは異なる(創2…7)。アダム・カドモンは、「神の似像(ツェレム)に、神の似姿(デムート)に造った」神の超自然的な、最初の創造だった(創1…26…27)。プラトンの「イデア論」のように、アダム・カドモンはまさしく「神の似像」であり、神の栄光を受け入れる荘厳な器、理想の人間である(Pエリ4…4、レビR20…2)。地上のすべての人間はアダム・カドモンの似像である。わたしたちは、いわば、まさに「神の似像の似像」なのである(バトゥ58a)。

ラビ・ヒーヤは言った。——聖なるお方が地上に住む人を創造されたとき、人を天上の人、アダム・カドモンに似せて造られた。天使たちは彼(アダム・カドモン)を見て、「あなたは、人を神とほとんど等しく造られ、人に栄光と栄誉を授けられた」と大きな声で言った。アダムが罪を犯

し、追放されると、聖なるお方は深く悲しまれた、と言われている。というのも、聖なるお方が創造したときに、「あなたが御心に留めておられるとは、人間は何者なのでしょう。か。人の子は何者なのでしょう。か。あなたが思いやる」とは(詩8…5)と言われたことを思い起こしたからである。

ミドラッシュによると、アダム・カドモンは両性のあらゆる面を持ち合わせた両性具有者である。彼は宇宙の端から端まで広がり、すべての創造を含んだ大宇宙である。ラビたちは、アダム・カドモンは創造を具現化している、と信じていた。中世の聖書注解学者アブラハム・イブン・エズラはこう述べている。

人間の靈魂と人間の肉体の構造の秘密を知っている者は、上の世界についても理解することができる。というの、人間の肉体は小宇宙の似像だからである(出25…40の注解)。

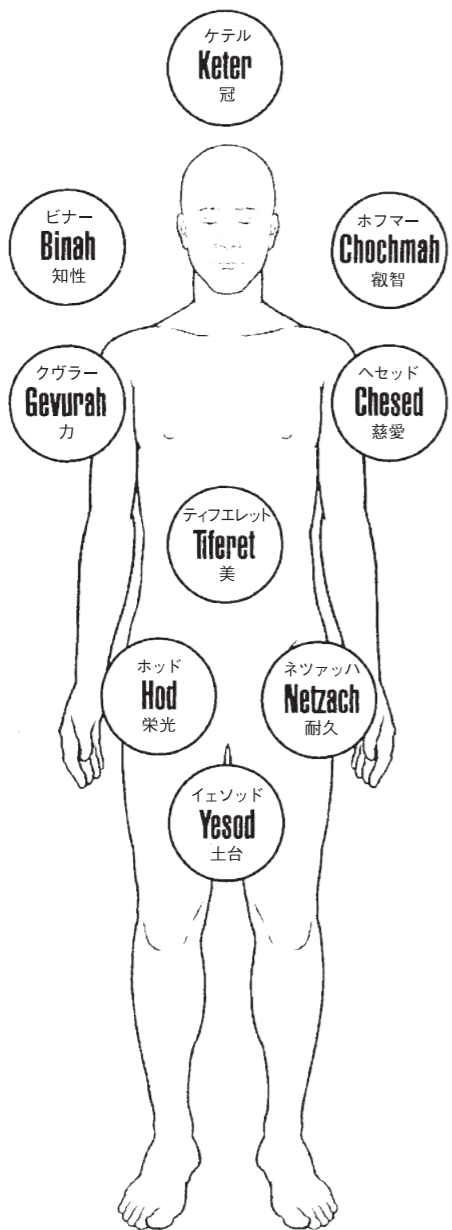
アダム・カドモンが創造されたとき、彼は畏敬の念を起こさせるほど素晴らしいので、天使たちは彼を神と間違えて、彼を崇拜し始めた(ハギ12b、14b、創R8…1、レビR14…1)。「天の人」という観念は、アダム・カドモンをすべての人間の靈魂の根源的な靈魂として見ていた最初の文書セフェル・

ハ・バビールから始まり、カバラの体系の顕著な特徴となつた。

(先に論議した来世)のことは、靈魂の安らぎの場のことである。イスラエルの状態が良いとき、これらの靈魂は外に出ることができ、この世にやって来る。しかし、良くないときは、(これらの靈魂は)外に出ない。それゆえに、「ダビデの子は、グフ(肉体)のなかのすべての靈魂が完全なものとならないかぎりやって来ないだろう」と言われている

る。「グフ(肉体)のなかのすべての靈魂」とは何を意味しているのか? これは、アダム(カドモン)の肉体のなかのすべての靈魂について言っているのである。(すべての靈魂が完全なものとなると)新しい靈魂が外に出ることができる(バビール184)。

神秘主義の数多くの文書では、アダム・カドモンはスフィロトの全体性を表している。一〇のスフィロトは、神と創造のあいだで仲介役として働いているアダム・カドモンの姿



アダム・カドモン

イゲレット・ソッド・ハ・ゲウラー

Igeret Sod ha-Geulah

『救いの秘密の書簡』。一六世紀のアブラハム・エリエゼル・ハ・レヴィが書いた、ユダヤ人コミュニティについての不可思議な民話の集成。

イゲレット・ハ・コデツシユ

Igeret ha-Kodesh

『聖なる書簡』。一三世紀スペインのナフマニデス(ラビ・ナフマン)の著に帰せられている中世の神秘的なセックス手引書。ゲルシヨム・シヨレムはヨセフ・ギカティラが著者であるとしていたが、その後、ベルシアのハマダンのカバリスト、ラビ・ヨセフ(一三世紀)が著者であるとの説を唱えた。モシエ・イーデルは、著者不明の作で一二八〇年頃に書かれたのではないかと述べている。

この書は、人間のセックスはブレローマ(メルカヴァー)で起こっている神性との交感の模倣である、と説き、セックスは天の秩序を支えるためにテウルギアの役割を果たしていると語っている。

カバラの道における男性と女性の秘密とはそういうものである。それゆえに、この合一(人間のセックス)は、適切に行われるならば、高尚なことであり、メルカヴァーも、

男性と女性のこのようにあれこれを合一させる。

この書は読者に「夫婦のセックスは、適切なときに、正しい目的意識でなされれば、聖なる純粋なことである。セックスを汚らしい醜いことであり、神が禁じていることである、などと考えるはならない」と述べて、セックスの本質、セックスをする適切な時(シャバットの夜)、セックスの前の適切な食事、セックスの霊的な目的、セックスの体位とテクニク、双方の満足度、そしてセックスをしているときにはどこに意識を集中させるべきかなどについて教示している。

↓「ズイヴァ・カディシヤ」「肉体」

異言と自動書記

Xenoglossia and Automatic Writing [ハブライ語：シエム・ハ・ドレーシユ、シエム・ハ・コテーヴ]

異言とは、他人の霊に憑依された人がトランス状態で語る現象(チャネリング、霊界通信)。このような経験は、聖書においてはほんの少ししか報告されていないが、トランス状態で預言することと似ている。最初の明確な記述は、キリスト教の新約聖書に現れた(使徒2:17-18)。ここでは、聖霊が憑依して、人びとは「異言を話した」。後のユダヤ教文書は、無意識に異言を話すことと預言を同一視していた(Shgyl)。異言は一五世紀以降のほとんどのユダヤ教の報告では、亡霊

や天使が憑依したものである、という特徴があった。ヨセフ・タイタツァクは、この現象について最初に詳細に語った人物である。おそらくは、これを経験したもつとも有名なユダヤ人は、ヨセフ・カロであろう。

異言と同じような現象に、自動書記がある。これは意識が変容した状態で、文章を書くことである。この現象は、聖書は実際には憑霊とは述べてはいないが、ダニエル書5:5-9の「壁に文字が書かれた」出来事に着想を得たのではないかと考えられている。

モシエ・デ・レオンは自動書記では有名な事例となっている。というのも、彼はゾハールの一部をトランス状態で書いた、という指摘もあるからである。ゾハール以後の中世の神秘主義者は自動書記をシエム・ハ・コテーヴ(書記の御名)と言っている。この神聖な名前は、天使ガブリエルと天使ミカエルを通して呼び出され、トランス状態を引き起こし、その状態で書かせるようにした(Sutze)。自動書記の慣行について述べている典拠資料はあるが、実際の「書記の名前」は記録されていない。タイタツァクはこう述べている。

この超自然的な筆記の秘密は、神の栄光に包まれた神の力が降りて来ることの秘密である。……この自動書記に含まれている秘密は、すべての人びとが信じるべき事柄である。……というのも、これは、預言であり、そのうち完全に真

実となるからである。……あなたは、望むときはいつでも、天使の案内によって、「書記の御名」の秘密を理解することだろう。……自動書記には、まず二日間断食し、三日目に自動書記を行うべきである。自動書記を行う者は、一滴もぶどう酒を飲んではず、食べるのは自動書記が終わってからだけである。断食をする前に卵を三個を食べると、神の御名の力が授けられる。自動書記は朝と真夜中過ぎに行うべきである。……

儀式の準備についての記述は、ステレオタイプ化したユダヤ教の力の儀式であり、ヘイハロト文書や呪術文書に現れる準備と同じような特性(数日間の断食。特に卵を控えること)を持っている。一七世紀のポーランドのサムソン・ベン・ベサハ・オストロポリも無意識に異言を話すひとつの形態であるシエム・ハ・ドレーシユ(問いの御名)について述べている。

- (1) Patzi, "Exorcism and Xenoglossia Among the Safed Mystics," 314-325; Bihu, "Dybbuk and Maggid," 255-257.
- (2) Matt, *The Zohar*, vol. 1, lxxv, xxiv.
- (3) Dan, *The Heart of the Fountain*, 179-180.
- (4) Twersky and Sepinus, *Jewish Thought in the Seventeenth Century*, 221-225.

エバ Eba [ヘブライ語：ハヴァ]

この語は「生きているもの」を意味している。すべての人間の母(創2・3・20)であるが、聖書の他の箇所では一度も語られてはいない。ある解釈の伝統によると、彼女は神が造った最初の女性ではなかったという。『ベン・シラのアルファベット』は、神はエバ以前にリリットを創造したと言っている。だが、ユダヤ人の伝統の大部分は、リリット伝承を認めてはいない。代わりに、神は両性具有のアダムを半分に分けて男性的な面と女性的な面を分離させることによってエバを創造したと説いている(ブラ61a、エル18a、創R8・1、Sリク5b)。神は、エバの婚礼の間として使うために宝石で飾られた一〇の天蓋を建てた。天使たちは彼女のアダムとの婚礼では立会人、楽団であった(Pエリ12)。

蛇の姿のデーモン・サマエルは、エバの守護天使がそばにいなかったときには、彼女を精神的にも肉体的にも誘惑した(ツタ9b、シャバ196a、Aナタン1・4)。サマエルが彼女のなかに射精したことによる墮落は、何世代にもわたって続き、神がトラーを与えるまで人間を苦しめてきた。そしてこのことは、カバラーの重要な神話となった(ゾハールI・37a、54a)。サマエルはエバに善悪を知る木から食べるようにさせ、アダムにも同じようにするようそのかした。エバはカインとアベルを同じ日に産んだ。カインはエバの愛人デーモンの子であり、アベルはアダムの子だった。

アベルの誕生後一三〇年間、エバとアダムは離れ離れであった。その間、複数のインクブス(男性の夢魔)が彼女が寝ているあいだに性交渉を持ち、彼女はたくさんデーモンを産んだ(創R20・11)。ある伝承は、彼女の三番目の息子セトは、実際にはアダムとのあいだの最初の子であったと語っている(創R22・2、23・5、Pエリ13)。彼女は夫とともにマクペラの洞窟に埋葬された(Pエリ20)。

ヘブライ語の護符の伝統では、エバの名前は護符のまじないに頻繁に用いられている。後の解釈では彼女は評価を落されていたにもかかわらず、こうした伝承は、彼女はその名前が守護となる功徳のある先祖である、と彼女をみなしている。

エフォド Ephod [ヘブライ語]

大祭司が神託を受けたり祭儀を司るときに着ていた金、青、赤、紫、緋色の刺繍された外衣(おそらくは、短いコートやポンチョのようなものであったと思われる)(出28・6・12、39・2・7、士8・26・27、サム上21・10、サム下6・14)。エフォドは純金のより糸を布により合わせて作るが、それは鎧のように幾分かわばって見えた(出28・25・30、ヨマ71b)。大祭司の胸当ては、その上に付けられた。大祭司が神託の職務を遂行するときにエフォドを着たということは、エフォドが単なる外衣ではなかった、ということ物語っている(サム上23・9、30・7)。大祭司がエフォドを着ると、イスラエルの人が

との偶像崇拜の罪は許された(ズヴァ87b)。
↓「ウリムとトニム」

エフタ Jephthah [ヘブライ語：イフタッハ]

聖書の士師、士師記に現れる首長。神は、自分の娘を供犠として献げるといふ彼の愚かな誓い(士11・31)への罰として、彼の肉が少しづつ剥ぎ落され、彼の最終的な埋葬場所がどこにもないように呪った(創R60・3)。

エフライム部族 Ephraimites

ヤコブの孫(ヨセフとアスナトの二番目の息子)の末裔の部族(創41・50・52、48、50)。エジプトで奴隷となっていたエフライム族の預言者たちは、神による救いの時を三〇年誤算した。イスラエルの人びとがエジプトを去ろうとしたとき、ペリシテ人に遭遇し、二〇万・三〇万人が殺された(Pエリ48)。
↓「出エジプト」

エベド・メレフ Ebed Melech [ヘブライ語]

ゼデキヤ王の宮廷のエチオピア人宦官(エレ38・7)。ある伝承は、これは預言者エレミヤの書記バルクの別名であると言っている。第三バルク書によると、義しき非ユダヤ人エベド・メレフはバビロン捕囚の六六年間ずっと眠っていたとい

う。ラビの伝承では、彼はエリヤとエノクのように、生まれたまま天に入って行ったと信じてられている(Yシム・367)。

エメック・ハ・メレフ Emek ha-Melech

『王の谷』。一七世紀ドイツのカバリスト、ナフタリ・パフラフがイツハク・ルーリアの影響下に書いた一七世紀の非常に影響力が大きかったカバラー文書。輪廻転生、悪霊の憑依、とりわけリリットなどのデモノロジー(悪魔論)について詳述している。

エリエゼル Eliezer

アブラハムの僕(創15・2、24・34)。彼は主人に驚くべきほど似ていた(Pエリ16、創R59・8)。彼はアブラハムに仕えていたときには素晴らしい機智と賢明さを示して、奇想天外な冒険をした(サン109b)。彼はロトを救出するためにアブラハムに同伴した唯一の男だった(ブスイ8・2)。彼がイサクの花嫁を見つけに行ったときに、天使ミカエルは彼に同行した(創R59・10)。彼は、死を被ることなくパラダイスに入った九人のうちの一人である。ある意外な伝承は、彼を巨人オグと同一人物であるとしている(Pエリ16)。

エリシャ Elisha [ヘブライ語]

前九世紀のイスラエルの預言者。エリヤの弟子。彼は、エ

るシムオン・バル・ヨハイは、ラグ・バ・オメル（オメルの三三日目）に不可思議な死を遂げた（ゾハール…イドラ・ズータ）。

オーメン Omen 【ヘブライ語…スイマン、オト】

未来において起こる物事のしるしや前兆を含んだ物語が聖書、タルムード、そしてその後のユダヤ人の伝統のいたるところに記録されている。ユダヤ人は、名前、災難、ふと耳にした言葉、難産、子供や動物の動き、天候、天の不思議な前兆、夢などのなかにオーメンを偶然に発見していた（セフェル・ハ・ヘズイヨノトとシヴヘイ・ハ・ベシユトは、ユダヤ人がオーメンにいかにも注意を払っていたかの数多くの実例を紹介している）。オーメンは良い場合も悪い場合もある。そのために、悪いオーメンを良いオーメンに変えるたぐいさんの方法が考え出されてきた。

↓「占」 「夢」

オーラム・ハ・トフ Olam ha-Tohu 【ヘブライ語】

「混沌の世界」。この語はハスイディズムの思想に頻繁に現れるが、様々な文脈で語られているので、正確な意味を確定するのはむずかしい。これはある文脈では、光を受容する最初の器が創造される以前の宇宙の一時的な様相、おそらくはイツハク・ルーリアの「ネクデイームの世界」と関連している。

るものと思われる。ブラツラフのラビ・ナフマンのリクテイ・モハランでは、それは現世と来世のあいだの地下の領域であり、そこでは亡霊が徘徊し、安住の場を探し求めている。他方、ハバド派の形而上学では、それは高次の領域であり、そこから人間を養っている生命のある食べ物（つまり、植物、動物、肉など）が流出している。

↓「食べ物」 「ディブーク」 「亡霊」 「流出の四世界」

オリーヴ Olive 【ヘブライ語…ザイト】

オリーヴの木は平和の象徴である。というのも、千年以上もの長きにわたって生きるからである。ゼカリヤは、オリーヴは神の恵みが尽きることなく与えられることを象徴していることがわかった（ゼカ4）。オリーヴ油は王と祭司を塗油して聖別するために用いられていた（詩133…2）。また、終末の日にはメシアに塗油するためにも用いられる。ラビたちは、オリーヴを食べるとトラーを記憶する能力が高まると信じていた。

ゾハールはオリーヴ油をホフマーと結び付け、スフィロートのランブの流出への寓喩として受け止めていた（I…240 a, II…87 b, III…34 a）。

公然となされている呪術的な慣行には、オリーヴの木の葉を用いるものがある。ハイ・ベン・シェリラ・ガオンは、神の御名を書いたオリーヴの葉を強盗に投げつけると、彼らを

しびれさせることができる、という信仰について述べている。あるヘイハロート文書のなかの呪句は、サル・ハ・トラーを召喚するための準備としてオリーヴの葉を食べることを秘められた教えに通曉している者に要求している。

↓「油」 「食べ物」 「薬草と野菜」

オリーヴ山 Mount of Olives 【ヘブライ語…ハル・ハ・ゼイティーム】

キドウロン谷を越えた、エルサレムの真東にある山。シエヒナーは神殿が破壊された後に、オリーヴ山を越えて離散の旅を始めた。終末の日に神が自らを顕現させるのは、この山である。メシアが来臨すると、エリヤ（あるいは、ガブリエル）はこの山の頂上でシヨファールを吹く。すると、山はばらばらに分割され、山に埋葬されていた死者を生き返らせる（エゼ11…23、ゼカ14、哀R…プティフタ25、Aナタン34）。

オール Or 【ヘブライ語。複数形はオロト】

ヘブライ語で「光」を意味するオールには、ほとんど無限に近い数の秘教的な隠れた意味がある。オールについてのものも複雑な分類は、おそらくはイツハク・ルーリアの教えであろう。たとえば、彼の体系では、三つの異なった原初の光の種類がある。

オール・イフディーム（結合された光）——これはアダム・カドモン（カドモン）の頭から流れ出ている光の、もつとも高位の流出。この光から最高位のスフィロートの段階が形成される。

オール・ネクデイーム（輝いている光）——これは原初の人間の臍から流れ出ており、スフィロートの中間構造を形成する。

オール・ベルデイーム（降り注ぐ光）——これはアダム・カドモン（カドモン）の男根から流れ出て、下位の世界に形と生命を与える。

↓「光」

(1) Fine, Physician of the Soul, Healer of the Cosmos, 133.

オルパ Orpah

ルツの義理の姉妹（ルツ1）。モアブ人。ミドラツシユでは、彼女は性的に乱れた女性であり（ルツR2…20）、巨人ゴリアトとイシュビ・ベノブの母親だった（ルツZ1）。彼女は息子のためにダビデと激しい闘いをした（サン95 a）。彼女は自身が巨人であったかどうかは不明である（Mルツ2…9）。

↓「巨人」

た聖書^{*}の人物。彼は、その厚かましい振る舞いのために地に呑み込まれてしまった(民16:26-35)。賢者たちによると、コラハはヨセフ^{*}が隠した財宝を見つけたことにより莫大な富を得ていたので、たいそう傲慢だった彼の財宝の鍵だけでも三〇〇頭のラバに負わせるほどだった(プサ119a、サン110a)。

ある伝承によると、コラハは焼かれて、すぐに埋められた(Tコラ23)。また、地がコラハを呑み込んだとき、地は真空のようになり、彼の所有物すべては、たとえそれが遠くにいる人が彼から借りていたものであろうとも、割れ目のなかへ落ちて行った(JTサン10:1、民R50)。彼と仲間たちは、ハンナが彼らのために祈るまではゲヒノム^{*}で焼かれていた(創R98:3)。彼女の功徳のおかげで、彼は最終的にはエデンの園^{*}に居場所を得た(Aナタン36、民R18:11)。ラツバ・バル・バル・ハナは、コラハとその仲間たちが落ちて行くときにその場所を見せてもらった、と語っている。コラハは地が裂ける音を聞いたとき、「モーセとトラー^{*}は正しい。そしてわれわれは嘘つきだ」と言っている声を聞いた(パトウ74a)。

ゴリアト Goliath

ガト人ゴリアトは、六アンマ半(約3m)も背丈のある聖書^{*}の巨人であった(サム上17:4)。彼はおそらくは投石器を

用いた若きダビデ^{*}によって殺された、と言われている(サム上17:49-51)。「おそらくは」という語を用いたのは、ダビデが実際にこの偉業を成したのかどうかに関して、聖書には矛盾した記述が見られるからである(サムエル記下21:19ではエルハナンが殺した、と書かれている)。ゴリアトは表向きはペリシテ人の子孫であるが、墮天使^{*}の子孫である聖書の巨人種族ラファイムである。

賢者たちによると、ゴリアトはダビデの曾祖母ルツの義妹オルバの子であるので、ダビデとは親戚関係にあるという。オルバはゴリアトの他に三人の巨人を生んだ。ゴリアトは百人の父親(ポリスベルマ「多精子」)から生まれたという。ペリシテ人の宿营地からひとりの戦士(ベナイム)が出て来た。……「ベナイム」とは何を意味しているのだろうか? ラブは言った、それは、汚点なく作られた(メブネ)ものことである、と。サムエルは言っている、彼は兄弟のうちで真ん中(メイノニ)であった、と。ラビ・シラの学派では、彼は建物(ビニヤン)のように作られた、と説明している。ラビ・ヨハナンは、彼は百人の父親とひとりの母親の息子(ベン・ナネ)である、と言っている。ラビ・ヨセフは、「ガト人ゴリアトと名付けられた」というのは、あらゆる男たちが彼の母親をぶどう搾り器(ヘブライ語でガト)のように押し倒したからである、と言っ

いる(ソタ42b、ティガ8)。ダビデは彼を打ち負かすために神秘的な力を使い、邪視^{*}で最初に彼を殴った。小さいダビデが投石器で彼を倒すと、天使は彼の顔を地面に押しつけて息を詰まらせ、ダビデを助けた(レビR21:2)。彼にはイシュビ・ベノブという四人兄弟のひとりで、巨人の弟がいた。彼はイスラエルの通常の兵士七万人に匹敵するほどだった(M詩18:30)。ミドラツシユ^{*}によると、彼はダビデを捕え、巧妙にも死んだように見せかけたが、神は滑稽で超自然的な激闘の末にダビデを奇跡的に救出したという(サン95b、創R59)。彼はダビデの戦士のひとりに殺された(サム下21:16-17、ルツR1:4、Mシエム20:106-108、21:109、Tエモ4、ゾハールIII:272a)。

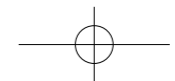
コルドヴェロ、モシエ Cordovero, Moses

ツファアットのカバリスト(一五二二-一五七〇年)。彼はヨセフ・カロとシユロモ・ハレヴィ・アルカベツの弟子であり、ラマクとも呼ばれていた。パルデス・リモニム(『さくろの園』)は彼の代表作であり、おそらくは、それまでに書かれていたものなかでも、古典的カバラ^{*}をもっとも包括的、体系的に叙述したものである。この書には、神智学、天使論、悪魔論、テウルギア^{*}についてのたくさんの教えが含まれている。また、彼は、トマル・デヴォアラ(『デヴォアラのなつめやしの木』)の著者でもあり、この神秘主義的、倫理的小書では、

人間の罪はマシュヒート(破壊的な存在)を生み出し、トラー^{*}の力はサマエルとあらゆる邪悪な力を無効にする、と語っている。彼は神秘神学を理解しやすく教えていたが、よく理解できないこともあった。彼はエリヤ^{*}の訪問を受け、アブラハム^{*}の僕エリエゼルの生まれ変わりであると言われていた。彼はイツハク・ルーリア^{*}の師であったが、ルーリアは非常に異なった神秘的世界観を発展させた。ある説によると、彼を埋葬するときに、彼の遺体の上を雲の柱と火が舞っていたという。

ゴーレム Golem [ヘブライ語]

「形」「人間の形をしたもの」の意味で、ヘブライ語^{*}アルファベットの創造的な力によって生命を吹き込まれた、人間のような、人間が作った存在。人間は人造人間を作ることができ、という信仰は、古代の呪術師のあいだでは広範囲に及んでいた。聖書にはこの観念への言及が見られるが(詩篇139:16「わたしのまだ形をなしていない体ガルミ」「胎児」)をあなたの目に見ておられた)、特にこの観念の根拠は、セフェル・イエツィラー^{*}に見られる。この書では、アルファベットを神の御名と組み合わせ、隠れた神秘的な力を操作することを学ぶことによって、人間は「小さな創造者」になれる、と説いている(長文の校訂本の6)。これは、神が宇宙を創造する仕事において、アルファベットの文字を、とりわけ、神の御



たり」、名前を変えたり、その子の衣服を第三者にあげたりすることによって、死の天使を混乱させることもできる。また、人が重病となった場合、死の天使を騙す目的で、その人に別の名前を付けたりした。ロシシュ・ホデツシユの祈りは、死の天使に来たるべき大祝祭日の日を誤解させるために、テイシュレイの月(民間暦の新年の月)には朗唱しないのが慣習となっている。というのも、死の天使が翌年に死ぬ人を決めるからである。ある伝承によると、ダビデはシャバットに死ぬことがあらかじめ分かっていたので、シャバットにはトラーの学習をして、そうして、死の天使の目をそらして、シャバットに死んだ。慈善行為をしたりトラーを学習することによって死の時期を延期させることができるが、死を避けることはできない(創R 21:5、出R 30:3、38:2、民R 23:23、T創11、メアム)。

シビユラの託宣 Sibylline Oracle

ヘレニズム・ローマ時代の著作の集成で、ユダヤ教的な内容もいくつが含まれている。シビユラとは、その時代の人びとのために予言した複数の女性託宣者たちの名前である。いくつかの使信(とりわけ託宣4と5)はユダヤ人が著作したものであり、おそらくは、アレクサンドリアのユダヤ人ではないかと考えられている。

詩篇 Psalms (ヘブライ語: トウヒリーム)

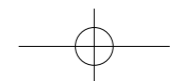
ダビデの著作に帰されている一五〇篇の詩と聖歌から作り上げられている聖書の詩篇。いくつかの詩篇は聖書の他の書でも語られている。とりわけ有名なのはサムエル記下22(詩篇18から)とヨナ書2(詩篇120:1などから)である。死海文書のなかからは非正典の詩篇が見つかっている(4Q435-438 [聖歌バルヒ・ナフシ]、11Q11)。

聖書の詩篇を預言、占い、守護、さらには、呪術的な目的で用いることは、古代にまでさかのぼる。このことのもっとも古い形跡は死海文書に見られ、今日まで続いている。一六世紀には匿名の著者がシミーシュ・トウヒリーム(詩篇の活用)を書いた。この書は、様々な詩篇を護符、守護の儀式、テウルギアで活用するための手引書であった。

一九世紀のイラク・インドのラビ・エゼキエル・シエム・トーフ・ダヴィイドのユダヤ・アラビア語での詩篇の注解には、デーモンとの闘いから蛇に噛まれたときの治療法まで、詩篇のテウルギアの用法が記されている。実際に役立つ詩篇の事例は左記の通りである。

詩篇1は、過ちを犯しそうなときには防いでくれる。

詩篇9は、病気で苦しんでいる子供を治すのに用いられる。



詩篇16と19は、泥棒を見つけ出すのにもっとも役立つ。この詩篇は占いの儀式の一部として唱えられる。儀式では容疑者の名前が書かれた粘土板が生水に溶かされる。

詩篇23は、カイロ・ゲニザの断片文書では、天使ミカエルに夢で見たことを質問する儀式で唱えられた。

詩篇29は、水面に映し出された啓示を見るための儀式の一部として、水の上で唱えられる。

詩篇31は、邪視と闘うために唱えられた。

詩篇49は、熱を下げるために唱えられた。

詩篇67は、第二節から第八節まで(第一節は指揮者のための節)は、正確に七節四九語で構成されており、オメル^{*}の四九日間に読まれる。正しいカヴァナーを持って唱えれば、投獄されないですむ(アブラハム・ガラント)。

詩篇91は、第七節と第一〇節の言語に基づいて、「苦痛の歌」(シュヴオ15b)とタルムード^{*}で呼ばれており、病気と霊的な攻撃に対する防御のために、実際にもっとも頻繁に引用されている詩篇である。



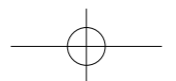
詩篇109は、特に第六節は、逆にして最後の語から唱えると、悪霊祓いを行うのに役に立つ。

詩篇119は、一番長い詩篇(二七六節)で、アクロステイック^{*}に基づいて構成されており(各節の語頭文字は八節毎にアレフ・ベイト順に、すなわち、一〜八節の各節はアレフで、九〜一六節の各節はベイトで、…一六一〜一七八節の各節はシンで、そして、一六九節から最後の二七六節までの各節はタヴで始まっている)、文字と節のすべてが防護のために用いられている。

詩篇121は、夜の危険な存在に対する防御の最良の手段となっている。

トウヒリーム・イード(詩篇のユダヤ人)と呼ばれていた、ハスイディズムの師イエヒエル・マイル・リブシツツは、問題を抱えているユダヤ人は彼の所に来て、問題に適した詩篇を指示してもらってそれを唱えればいかなる苦難からも救われる、と確信を持って言っていた。

↓「外典」「護符」「死海文書」「聖書」「聖書占」



R 70、哀R、1..23、P エリ28..9。

スフィロート Sefirot (ヘブライ語)

原義は「数字」「領域」の意味。単数形はスフィラー。スフィロートは、宇宙に現れている神性の一〇の元型的属性や構造である(イエツィラー1..4..6)。スフィロートは「一〇の王冠」であり(ゾハールIII..70a)、完全なる神性と不完全なる現実を結び付け、両者を執り成す流出である。一〇のスフィロートの教義は、ユダヤ教神秘主義だけに見られる独特な思想であり、カバラ*神秘思想のまさに心臓部を形成している。

創造を形成している一〇の元型的な力という観念は、ミドラッシュ*で最初に語られていた。

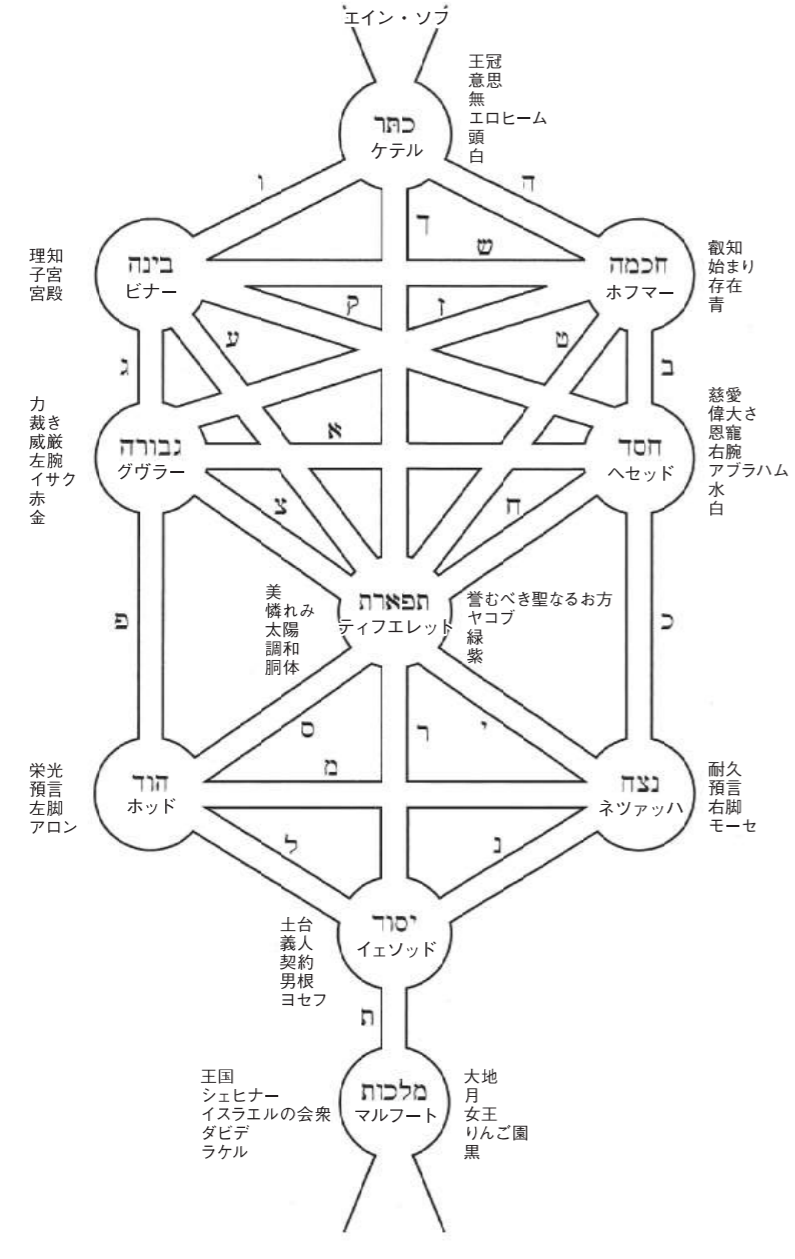
ラビ・ズトラ・トビアはラヴの名前にかけて言った。――「世界は一〇の能力と力によって創造された。それらは、知恵、理智、理性、知力、懲戒、力、正義、審判、愛、慈悲である(創1)。

スフィロートという語は、セフェル・イエツィラー*に最初に現れた。より詳細な記述は、バヒール*のいくつかの箇所で見られている(135、137、190)。後の文書は、聖典のなかにより確固とした根拠を探し求め、下位の七つのスフィ

ロート(総称的にラザ・デ・メヘマヌータ「アラム語で「信仰の秘密」の意味」と呼ばれ、観想する神秘家、信仰厚き者に対してのみ開かれている神の内面へいたる領域)の名前の論証テクストとして、歴代誌上29..11(グドゥラー、グヴラー、ティフェレット、ネツァツハ、ホッド、カヴォード)と12(オシエル、カヴォード、コーアツハ、グヴラー)を挙げている。カバラ*が発展するにつれて、別な意味が現れ、各スフィラーにはますます複雑な呼称が付けられた。そして以前のものは後に発展したものに組み込まれていった。

スフィロートを理解するためには、まずは、カバラ*でなされている、無限で不可知の神であるエイン・ソフ*と、多種多様で、限定された、理解可能な世界の差異を理解することが肝要である。スフィロートはこれらふたつの面を結び合わせる神の理解可能な本性である。これら一〇の神の理解可能な属性は、言葉で言い表すことができない神性と限定的で定義できる宇宙のかけ橋となっている(バル32..2)。この架橋の過程は、「図表化されており」、わたしたちが今日「フローチャート(過程図・流れ図)」と言っている、相互連関のネットワーク構造として慣例的に図示されている。一〇のスフィロート、すなわち、ケテル、ホフマー、ビナー、ヘセッド(グドゥラー「力」、グヴラー「ティーン」「裁き」、ティフェレット、ネツァツハ、ホッド、イエソッド、マルフト)は、二二の「小路」でつながっており、図表を降下し、横断する。

〈スフィロート〉



たと述べている (Mヨマ5…2、ヨマ54a、スカ49a、53a、J Tサン10…2、29a、J Tヨマ5…4、8…4、Pエリ35、ゾハールII…15a)。

ゾディアック Zodiac [ヘブライ語：ガルガル・ハ・マザロート]

黄道十二宮。占星術で読み、解釈する目的のために、夜空を一二の帯に分ける体系。ゾディアックは非常に古く、聖書では前七世紀の初めには語られている。「……太陽、月、マザロート、天の万象……」(王下23…5)と聖書で語られているマザロート(マザールの複数形。星々。おそらくは、星座)は、ゾディアックを指す言葉であると解釈している学者もいる。別の学者は、イスラエルのヒルベット・エル・クオムの墓石に刻まれた図(前八世紀)は聖書での言及よりもっと古いゾディアックではないかと推測している。そこに書かれているアレフ、ベイト、メモ、アレフの頭文字四文字の序列に基づいて、それらはゾディアックの四つの宮(アリエー、ベトウラー、モズナイム、アクラブ)であると考えられている。

西欧の占星術の伝統に由来した、あるいは、少なくとも、その影響を受けたユダヤ教のゾディアックの体系は、古代末期には確かに存在していた。というのも、神秘主義的な手引書であるセフェル・イエツィラーは、ゾディアックの宮について繰り返し語っているからである(5…4、10)。さらに驚

くべきことには、北イスラエルのベイト・アルファで発掘された後六世紀のシナゴグの真ん中の装飾モザイク床には、良く知られたゾディアックの十二宮の素晴らしいモザイクがあった(このモザイク床の装飾でもっとも不思議なものは、ギリシアの太陽神ヘリオスが図柄の中央にはっきりと描かれていることである)。このことは、ゾディアックの十二宮(マザロート)のヘブライ語名がすでに定着していた、ということ物語っている。十二宮のヘブライ語名(宮、星座、ラテン語名)は左記の通りである(Yシム18)。

- タレー (白羊宮、牡羊座、アリエス)
- シヨール (金牛宮、牡牛座、タウルス)
- テオミーム (双子宮、双子座、ゲミニ)
- サルタン (巨蟹宮、蟹座、カンケル)
- アリエー (獅子宮、獅子座、レオ)
- ベトウラー (処女宮、乙女座、ウイルゴ)
- モズナイム (天秤宮、天秤座、リブラ)
- アクラブ (天蠍宮、蠍座、スコルピウス)
- ケシエツト (人馬宮、射手座、サギッタリウス)
- ゲデイ (魔羯宮、山羊座、カプリコルヌス)
- デリ (宝瓶宮、水瓶座、アクアリウス)
- ダギーム (双鱼宮、魚座、ピスケス)

中世の初期には、ゾディアックはユダヤ占星術の一部として受け入れられ、伝統的なユダヤ教の天使論と融合された。そうして、各宮は固有の天使長と天の軍勢を有した(ブラ32b)。あるミドラッシュは、ゾディアックの宮を人間の生涯の進歩を図で示す寓喩として用いている(Tハア1)。神はゾディアックの各宮のために、天使たちの三〇の軍勢を造った。ひとつの軍勢が各宮の天の外周三六〇度を守った(ブラ32b)。セフェル・ハ・ラズイームやセフェル・ラズイェルのような呪術手引書のある箇所は、宇宙に対するゾディアックの影響力についての内容に充てられている。

中世のユダヤ人の多くは一般的に星々の力を認めていたが、中心的な人物のなかでは、天体の影響力の問題で意見が分かっていた。たとえば、合理主義哲学者マイモニデスは、占星術をまったく信じてはいなかった。一方、聖書注解学者であるアブラハム・イブン・エズラは、占星術を信じていた。イタリアの医師、アブラハム・ヤゲル(一五五三―一六三三年)は、患者の診断と治療にゾディアックを用いてもいた。ゾディアックの超自然的な影響力への関心は、ユダヤ人のあいだから消えて行ったが、完全になくなったことは一度もなかった。

ソドムとゴモラ Sodom and Gomorrah

ラビ文書は、ソドムの人びとは、聖書で彼らが犯した罪*

(創13…13、イザ1…9、20、エゼ16…19、20)とは比較にならないほどの奇怪な残虐行為を犯している、と語っている。それらには、親切なもてなしをすべきであるという法律に反したことをしたり、ベッドのサイズに合わせるために客人を伸ばしたり切ったりするような無理やり型に当てはめたりすることもあった。ロトの娘は、外国人に親切にしたということで焼かれてしまった(サン109b、創R49…6、Pエリ25)

供えのパン

Bread of the Presence or Shew Bread or Bread of display [ヘブライ語：レハム・ハ・パニーム]

一二個のパンは、象徴的な供え物としてシャバット(安息日)ごとに幕屋の、そして後には神殿の聖所の純金の台の上に置かれ、祭司の食べ物として供せられた(出25…30、レビ24…5、9、ギテ60a)。

神殿での祭儀の終焉とともに、この祭儀はユダヤ人の家庭に移行して家庭がミクダッシュ・メアツト(小さな祭壇(聖所))となり、ユダヤ人はシャバットと祝祭日には食卓の上にパンを、通常は二個のハラー(これは焼く前に練り粉から取りおいた奉納する供え物を象徴したパンである)を置いて祝った。このハラーは、シャバットにイスラエルの人びとが受け取った風変わりなもの、レハム・ミシユネー(二倍の量のマナ)を象徴している(出16…22)。

中世になるとマズイキームという語はさらに広く使われるようになり、ラシは小悪魔を指す語として好んで使っていた。

マツ・ハツ・マツ・ハツ MTzPTz MTzPTz [ヘブライ語]

テトラグラマトンのアトバシユ(換字暗号テムラー)のひつつの型(YHVHの四文字ユッド、ヘイ、ヴァヴ、ヘイは最初の文字アレフから数えると、一〇番目、五番目、六番目、五番目であり、MTzPTzの四文字メム、ツァデイ、ベイ、ツァデイは最後の文字タヴから数えると一〇番目、五番目、六番目、五番目である)(ゾハールI…20a)。出エジプト記34…6…7で、神の憐みの一三の特性(1. YHVH、2. YHVH、3. 神(エル)、4. 憐みに満ち、5. 恵み深く、6. 怒ること遅く、7. 愛と、8. 真実に満ち溢れ、9. 千代までも慈愛を保ち、10. 悪行と、11. 背きと、12. 罪を、13. 赦す)が宣言されたとき、「YHVH、YHVH」とテトラグラマトンを二回繰り返して言ったことをまねて二回繰り返す。神の憐みの一三の特性を活発にするためのまじないで用いられている。

マナ Manna [ヘブライ語：マン]

「これは何だ?(ヘブライ語で「マン フー」)(出16…15、31)という語から生じたと思われる。マナは、イスラエルの人びとが荒野を四〇年間さまよっていたときに彼らを支えた天からのパンであった(出16…4)ラビの伝承によると、マ

ナは創造の第六日目の黄昏時に創造され、天の貯蔵所に蓄えられていたという(Pアヴォ5…6、Pエリ3、Tシヤラ22)。マナは毎朝露とともに降って来て、誰も現れないシヤバットののために金曜日には二倍の量が降った。マナが降る前には風が吹き、そのためにマナが汚れることはなかった。イスラエルの人びとのなかの義人には、すぐに食べられるマナが、家の扉の前に降って来た。他の人びとはみな、マナを集めに外へ出て、食べるために調理した。マナは食べる人によって、パン、蜂蜜、母乳、オリヴ油など異なった味がした。マナが日中の太陽で溶けると、鹿やガゼルなどの動物たちがやって来て、マナの川で飲んでた。これらの動物の肉は非常に美味しく、珍味であった(ヨマ75a、メヒ…ベ…シヤラツフ)。ヨマー篇75bでラビ・アキバはマナをレヘム・アデイリーム(強力な者「天使」のパン)と呼んでいる。

イスラエルの人びとが約束の地に入った瞬間に、マナは降らなくなった。だが、マナの見本は第一神殿の至聖所に展示されていた。マナはメシアの時代に再び降る。ゾハールによると、マナの物語は、下位の世界を「養い」支える神聖な流出の比喩的な表現であるという(I…157a…b、II…183a)。別の節では、マナは男性の生殖能力の神聖な源泉である、と語っている(II…213b、III…155b)。

マナセ・ベン・イスラエル

Manasseh ben Israel

一六〇四年ポルトガルのマラーノ(隠れユダヤ教徒)の家系に生まれ、その後オランダへ移住。そこで、ユダヤ教に復帰した。一六五七年にアムステルダムで死去。ユダヤ人のコミニティの指導者、ラビ、カバリスト、教師、最初のヘブライ語印刷所の創設者。彼は、輪廻転生、デーモン、ディブーク、憑霊などの物語についてわかりやすく要約したセフェル・ニシユマツト・ハイーム(「生命の息吹」)の著者である。

マハネー Machaneh [ヘブライ語]

原義は「宿营地」の意味。天の天使の軍勢は、それぞれの役割と主権によってそれぞれの「宿营地」に分けられている。この語は出エジプトの物語から生じた。イスラエルの一二部族はエジプトを出て、マハネーと呼ばれる部族編隊ごとに、荒野に四〇年間も寄留していた。天のマハネーそれぞれは、天使長によって治められている。神秘主義者も、神の力が満ち溢れ、いたるところに顕現しているカヴォードとグヅラーのことを神のマハネーと語っている(プサ104a…b、オラハ18…1…3、JT71)。
↓「昇天」

魔方陣

Magic Square

ヘレニズム・ローマ時代からの数秘学の一要素として有名なユダヤ教の魔方陣は、神の御名の置換とノタリコンをほとんどの場合含んでいる。魔方陣はヘブライ語の印章、護符、呪文録には見られる特徴である。その呪術的な効用は、護符

ו	י	מ	כ	ח	ו	י
י	מ	כ	ח	ו	י	מ
מ	כ	ח	ו	י	מ	כ
כ	ח	ו	י	מ	כ	ח
ח	ו	י	מ	כ	ח	ו
ו	י	מ	כ	ח	ו	י
י	מ	כ	ח	ו	י	מ

申命記7：15の最初の6語の最初の文字の置換を用いた魔方陣